１０月セミナーを１０月２８日(土)　１３：３０～１５：３０に開催しました。

会　場　　愛知文教大学　２０１教室

テーマ　「夏目漱石『坊っちゃん』―明治の教育雑誌から読む〈学校〉―」

講　師　愛知文教大学　准教授　佐藤　良太先生

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、教科の専門性を身に付けることです。

魯迅の故郷を中３で読みます。この作品で魯迅は当時の世間を変えようとしたとされます。

漱石の「坊っちゃん」にもそういう意図があったということに驚きました。リズミカルで楽しく大衆的なフィクション作品としてしかとらえていなかったからです。

「坊ちゃん」が学校騒動を背景としており、これを読みとくことで当時の学校問題がうきぼりに なってくるという視点も目からうろこでした。

国語の授業を行うにあたって、教材研究が大切だと言われます。教材研究は素材研究だけではありません。学習者、研究指導者研究もあります。でも現場の小中学校教諭は、教材研究=即座に指導研究ととらえ、授業をどう進めるかばかりに目を向けます。私は、教材研究は教材の価値を見抜くことだと思っておりそのためにも今日のような専門性のある研究こそが授業づくりにも不可欠だと改めて実感しました。

本作品は中学の教科書には取り上げられていませんが、中３で授業してみたいなあと思いました。

佐藤先生の語りにひきこまれ、また、その造詣の深さに 感服いたしました。すっごく楽しかったです。ありがとうございました。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、学校騒動ということです。

坊っちゃんという作品、その背景にある出来事などを深く知ることができました。また、私にとって難しい話ではありましたが、とても興味深いものでした。特に学校騒動という背景を知らなかったので、驚きました。また、そのことを踏まえて考えるととても納得できました。

今回のセミナーを通して作品を理解するというのはその時代背景までも理解するということになるのだなと実感しました。普段何気なく読んでいる本でも時代背景を考えるとまた違った読み方、見方ができるのかなと思いました。また、自分が話を聞く前に読んだ坊っちゃんと話を聞いた後に読む坊っちゃん、また印象が変わってくるだろうなと感じました。今までよりも更に夏目漱石さんのことが好きになりました。

ありがとうございます。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、『坊ちゃん』が意外にも社会的な小説だったことです。

猫や坊ちゃんは、漱石の作品の中でも軽い作品だと捉えがちだが、時代背景と作品の中身を考えると、かなり社会的な作品だというのが、佐藤先生の主張だった。学制頒布という前代未聞の近代化を図った明治は、〈学校騒動〉の時代でもあったらしい。それに関しては、よく理解できた。

ただ、その時代の中等教育は、あくまでもエリート（田舎のエリートかもしれないが）対象の教育だった。そのエリートが従順ではなく勝手なことをしていたことが〈騒動〉と受け止められていた傾向もあったのではないだろうか。

教育史の研究から、確かにこの時代は〈学校騒動〉の時代だったとの裏付けがあると、より説得的になると思う。教育史の観点からは、むしろ無理やり急激に学校制度を作ったことによる弊害や影響が語られていたように思う。 ただ、これだけ当時の教育誌で問題視されていた〈学校騒動〉が、なぜ教育史ではそれほど重視されてこなかったことの方が印象に残った。同盟休校や旧制中学校・旧制高校の生徒の放埒が、むしろ好意的に語られている印象を受けるのはなぜだろうか。 作品を時代背景のコンテクストの中で解釈するのは、当たり前のことでもあるが、それが『坊ちゃん』を対象に語られるというのは新鮮だった。
今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、作品は時代を経て読み継がれるにつけ、読者の解釈がその時代背景により変化していくものであり、作者の込めた思いや世界観が忘れ去られることがあるということです。 佐藤先生曰く、江戸文学との関わり、落語そして漱石の事実譚として読まれていた「坊ちゃん」という作品が意外や社会派的な作品として書かれ、当時の人はその背景を通して読んでいたということに大きな衝撃を受けました。自分の親父も、明治期のエリートとして教員を小ばかにしていた中学生の物語として読んでいたと話していたことを思い返していた。 さらに、学校を取り巻く社会の批判は、いつの時代も変わらぬものである。当時、教育関係者以外の読者を多く抱えた雑誌「太陽」に掲載された記事にその事実が書かれている。こうした、一つ一つの事象を積み上げた佐藤先生の研究は、説得力があり大変におもしろい時間でありました。惜しまれるのは、より多くの教育関係者にこのセミナーが届けられなかったことであります。
今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、作品の時代背景と授業者として佐藤先生配慮に学ぶことが多かったです。 作品自体は読んだことがあったが、時代背景については知らないことが多く大変勉強になった。「学校騒動」という社会現象を知ることによって、四国あたりのある中学校に限った話ではなく、その時代の学校について書かれた作品なのだと知ることができた。また、実際に受講する立場になってみるとパワーポイントやレジュメなどに様々な工夫がされているのだと感じた。教員として働いていく中で改めて教材研究に力を入れたいと思った。同時に、授業を受ける生徒のことをよく考えて授業準備をしていきたいと感じた。